



●大学スポーツの新たな夜明け

# UNIVAS 創設で 変革の時を迎えつつある 大学スポーツ

鈴木 大地・スポーツ庁長官 × 池内 啓三・理事長

2019年は日本の大学スポーツにとって、新たな一歩を踏み出した年として記憶されることになるかもしれない。米国の全米大学体育協会(NCAA)をモデルとして、一般社団法人大学スポーツ協会(UNIVAS)が発足するからだ。今回は、1988年ソウルオリンピック金メダリストでもあり、UNIVAS創設をリードする鈴木大地スポーツ庁長官と、学生時代はバスケットボールに打ち込んだ池内啓三理事長が、学生アスリートの学びやスポーツを通じた地域との交流などの話題を軸に、UNIVASと大学スポーツのこれからについて語り合った。

## ◆UNIVASは学生アスリートの可能性を広げる

**池内** 大学スポーツ協会(UNIVAS)設立の狙いをお聞かせいただけますか？

**鈴木** 大学スポーツは発展の可能性に満ちた領域だと思っています。これを更に活性化していくことで、スポーツ界全体の発展につながるだろうし、大学教育全体にも良い影響があるだろうと思っています。

日本の大学スポーツは今、変革を迫られていると私は考えています。そのため、私達は大学も競技も横断的に統括する一般社団法人大学スポーツ協会(UNIVAS)を立ち上げ、大学スポーツを更に発展させようとしています。

まず、UNIVASが目指すものの1つは、学生アスリートの競技と学業の両立です。今の日本は競技と学業の両立が容易ではありません。UNIVASを通じて、スポーツで活躍する学生が学業にもしっかりと取り組む環境を整えていきたい。そのためには、大学関係者の協力が不可欠です。みなさんと協力して取り組んでいきたいと考えています。

**池内** 学生アスリートの競技と学業の両立はどの大学でも課題ではないのでしょうか。私も本学の学生アスリート達に「アスリートである前に関西大学の一学生であれ」と言い聞かせています。しかし、文武両道を実践するのは簡単ではありません。

例えば、フィギュアスケートでは、幼少期から指導者について毎日練習しなければ、15歳から18歳の若さで世界レベルの選手と競うことは難しい。それと学業をどう両立させるか。長官ご自身は学生時代にどのようにスポーツと学業に取り組んでこられましたか？

## ◆アスリートである前に、 1人の学生として大切にしてほしいこと

**鈴木** 学生時代、オリンピック前の強化合宿時でも、容赦なくレポート課題を課す先生がいらっしゃいました。オリンピック前の大事な時期なのにと思いながらもその課題に取り組むわけです。しかし、その時、水泳と全く違うことに取り組むことで水泳漬けにならず、いい気分転換になることに気がきました。今振り返ると、オリンピック前だからと甘やかすのではなく、厳しく接してくださいました先生に感謝しています。

**池内** 学生の将来のことまで考慮し、ケアするサポート体制が必

要ですよ。レポートを提出しない学生を放置せず、先生からもうひと声かけて諭すことも、時には大切ですね。

もちろん、スポーツも学業も頑張りたいと積極的な学生もいます。先日、本学バスケットボール部員が「司法試験に挑戦したい。1年間休部しても可能性を試したい」と打ち明けてきました。これは、うれしかった。

**鈴木** アメリカのオリンピックが引退後何をしているかと言うと、医者、弁護士、会社社長など……たくさんのオリンピックがさまざまな分野で活躍を続けています。一方、日本ではどうでしょうか。

ソウルオリンピックで私と0.1秒を競い合ったデビッド・パーク選手も今は弁護士として活躍しています。そんな彼の生き方への関心もあり、日本で大学院を修了した後、私は彼が学んだハーバード大学へ水泳指導者の勉強に行きました。学生達は本当によく勉強していました。そこで、一度、学生に尋ねたことがあります。「君は水泳と勉強のどちらが大事なのか？」と。すると、しばらく考えてから「両方」と返事がありました。

勉強もスポーツも全力で打ち込む。このバランス感覚とメリハリを何とか日本で広めたいと思いながら、帰国後は大学で教壇に立ちました。

## ◆大島鎌吉が実践した文武両道のスポーツ思想

**池内** 何とか大学で文武両道の学生を増やしたいという思いは私も同じですね。

**鈴木** UNIVASでは、スポーツでも学業でも高い評価を得た学生を表彰するなど制度や仕組みを整え、将来的に広く社会で活躍できる人材に育てていきたいと考えています。

**池内** 学生アスリートはスポーツだけに打ち込めば良いのか。それで、引退後、社会の中で自ら人生を切り開いていけるのか。大学は「社会はそんなに甘くはない」ということを教える必要はない。そこで思い出されるのが、1964年の東京五輪で日本選手団団長を務められた大島鎌吉さんです。本学のご出身で、1932年のロサンゼルス五輪三段跳びの銅メダリストでいらっしゃいますが、学業も決して疎かにはされませんでした。

**鈴木** 大島鎌吉さんですね。もちろん存じ上げています。

**池内** 大島さんは偉大な先輩だなと今でもひしひしと感じます。世界記録を保持していたことも一流アスリートでありながら、学生時代から既にドイツ語が堪能。ずいぶん昔の話になりますが、大島さんが本学体育OB・OG会会長を務めておられた時に、警咳に接する機会がありました。その時に「勉強しない学生は学生ではない」ときっぱりとおっしゃっていました。

**鈴木** 一流の学生アスリートは勉強に費やしてきた時間が少ないだけで、目標を達成する能力はありますから、社会に出た後も一流になる素質を持っています。彼らをどのように育てていくのか。それは大学の教育力によるところも大きいのではないのでしょうか。

しかし、難しい問題ですよ。本来、学生は学業を優先し、放課後や週末などの時間でしっかり競技に邁進する。勉強に多くの時間を割かなければならない時期は、多少、競技力が落ちてしまっても仕方がないと思うことはあります。ただ、世界のトップになると、本人の意思や大学の思いとは別の論理が働くこともあると思います。

■対談

学生アスリートが自身の人生設計において、大学での学業や競技とどのように向き合うのか、自分なりに考えることも大切ですね。  
**池内** そうですね。しかしながら、学生アスリートは自身の人生設計を簡単に描けないことも多い。私はそんな学生のために、何をすべきかを考えられるようなキャリアプログラムを用意する必要があると思っています。

◆誰もがスポーツを楽しめる国へ

**池内** 東京五輪開幕までいよいよ1年半を切りました。今後、日本のスポーツがどのように発展することを期待されていますか？  
**鈴木** “するスポーツ”、“観るスポーツ”、“支えるスポーツ”を総合的に推進し、誰もがスポーツを楽しめる日本にしていきたいですね。  
 スポーツ庁が創設される以前、2012年の調査では、成人における週1回のスポーツ実施率が42.5%でしたが、現在は51.5%にまで高まっています。これを2021年度中に65%まで高めることを目標にしています。つまり、成人の3分の2が週1回スポーツを楽しんでいるという国にしたい。スポーツに親しむことで健康増進にもつながり、結果的に、医療費の削減にもつながっていく。東京五輪を契機に新しいスポーツ文化を創造し、世界に発信していきたいと思っています。



# UNIVAS

## Japan Association for University Athletics and Sport

◆大学は地域のスポーツ文化振興拠点

**池内** 2020年の東京五輪で東京のスポーツ施設が更に充実しますね。1964年の東京五輪でバスケットボール会場として建設された代々木第二体育館は、バスケットボールに携わる者にとっては憧れの地です。そこでは週末に学生リーグや実業団の試合が頻繁に行われています。関西にもそのような拠点となる施設が欲しいとも思っています。  
**鈴木** 確かに、東京には充実したスポーツ施設が多いですが、各大学にも立派なスポーツ施設があり、学生がホームアンドアウェイで往来する。これが大学スポーツのあるべき姿かなとも思います。  
**池内** アメリカの大学がそうですね。私もスポーツによって成長させてもらいましたので、大学のスポーツ施設を何とか充実させたいと思います。しかし、一私立大学が各競技の専用競技場を持つことは容易ではありません。スポーツ施設の充実についても、UNIVASで検討していただけたらと期待しています。  
**鈴木** 今のお話は理事長のお立場だと切実な問題ですね。確かにスポーツ施設は巨額の初期投資が必要です。ただ、その施設を活用した人の人生がどう変わったかまでをトータルに見てくださいと私はお話をしています。その施設で人々がスポーツを楽しむことで健康増進につながり、医療費が削減できれば、結果的にその施設はコストパフォーマンスが高いと言えます。ですから、建てた後の活用方法がやはり大事だと思います。

**池内** 関西大学では2015年に特定非営利活動法人関西大学カイザーズ総合型地域スポーツ・文化クラブ(通称:関西大学カイザーズクラブ)を立ち上げ、各種スポーツスクールやイベント等を企画運営し、地域の活性化、健康で幸せな生活文化の創造に寄与しています。昨年12月には、第3回「まちFUNまつりIN 関西大学」を開催し、地域に本学千里山キャンパスを開放したところ、親子など約7,000人が来場しました。小さな子どもが400メートルトラックを駆け巡り、人工芝のフィールドに嬉々として転がり、本学体育会野球部員やサッカー部員達の指導でボールを投げたり、蹴ったりしていました。  
**鈴木** 大学の地域連携はUNIVASのミッションの1つだと考えていますが、関西大学では既に実践されているんですね。素晴らしい。先ほどお話しましたが、スポーツ施設を新設・改修したならば、地域のためにも活用し、最大限にフル活用する。その点を含めて、スポーツ施設の在り方を考える必要があるだろうと思っています。大学のスポーツ施設は今や社会のインフラの1つです。UNIVASによって、スポーツを通じた大学と社会の連携をいい形で推進していけると良いですね。  
 今後、スポーツを文化として定着させていく時に、日本中の国公立大学が核となって、地域と共に発展していくことがやはり大事です。各大学のみなさんの声をどんどんお聞かせいただきたい。スポーツ庁もできる限りみなさんのお力になれるように、いろいろなことを検討していきたいと思っています。

**池内** 2019年はラグビーワールドカップ、2020年は東京オリンピック・パラリンピック、2021年はワールドマスターズゲームズと、日本国内で世界的なスポーツイベントが開催される3年間は「ゴールドンスポーツイヤーズ」と言うようですが、この3年間の足がかりとして、関西からも盛り上げていきたいと思っています。  
 また、大阪では2025年に万博が開催されます。この万博を関西活性化につなげるためには、大学もコミットし、産官学がしっかりと連携することも検討していきたいと思っています。  
 文化庁が京都に移転するとお聞きしていますが、スポーツ庁も大阪で関西を一緒に盛り上げていただくというのはいかがでしょうか？  
**鈴木** これは大胆なご提案をいただきました。(笑)

**鈴木 大地(すずき だいち)**  
 スポーツ庁長官。1967年千葉県生まれ。88年ソウルオリンピック金メダリスト(100メートル背泳ぎ)。89年順天堂大学体育学部卒。94年同大学大学院体育学専攻科コーチ学専攻修了。98年ハーバード大学水泳部のゲストコーチを務める。2007年順天堂大学医学部より博士号取得。13年順天堂大学スポーツ健康科学部教授。公益財団法人日本オリンピック委員会理事、公益財団法人日本水泳連盟会長など歴任。15年より現職。著書に「鈴木大地メソッド」毎日新聞社刊など。

**池内 啓三(いけうち けいぞう)**  
 学校法人関西大学理事長。1943年旧満州(中国東北部)生まれ。46年日本に引き揚げ、大阪府に住む。65年関西大学文学部新聞学科を卒業し、学校法人関西大学に奉職。92年評議員。96年総務局長。2000年理事。法人本部長、常務理事、関西大学幼稚園長を経て、08年専務理事、12年より現職。



学生アスリートはスポーツだけに打ち込めば良いのか。それで、引退後、社会の中で自ら人生を切り開いていけるのか。大学は「社会はそんなに甘くはない」ということを教えなければならぬ。

大学のスポーツ施設は今や社会のインフラの1つです。UNIVASによって、スポーツを通じた大学と社会の連携をいい形で推進していけると良いですね。

